

「国民経済進化論」の根本思想

淡 川 康 一

「ジュニア」（Bücher）教授の述作は経済学者に取つては何等の紹介をも、之を必要とせないのである。其の賞讃す可き業績である「第一四世紀及び第一五世紀に於ける、フランフルトの人口」は一八八六年に出版せられ、彼に経済史家との直接交渉を与え、而して歴史統計の分野に於ては独壇場たるの位置を占めさせたのであった。経済理論の彼の取り扱い方に於いては、彼は新歴史学派と心理学的な夤太利学派との中間に立脚したのである。彼の述作の完全な目録は「国家学辞典」(Handwörterbuch der Staatswissenschaften)に掲げられているから、此処に再び贅せないが、私はラヴェ

ー(Laveleye)の「原始的的所有権論」の、彼による敷衍された独逸版、「紀元前一四三年から二一九年に至る、奴隸労働者の判乱」と標題された小論稿及び労働の生理学と心理学との間の関係を論じた処の、其の独創的な、而して暗示に富む「労働と律動」及び彼の研究の一般的方向及び主旨を示すものとして、ワグナー(Wagner)の「政治経済学提要」への共同編輯等を再び喚起し度いのである。此の「国民経済の成立」と題する刺激的な労作は、一般の産業的発展に対する、著者の結論を与えるものであって、之に稍々類する基礎は、近代の経済学の出版物に求めるならば、独りシユ

モラー (Scholler) 教授の、包括的な「一般国民経済学綱要」第一巻に見出されるのであるが、資料の取り扱ひの方法及び此の研究の断案は、其の比類なき地位を保持せしめるに充分である。

第一篇及び第二篇は熱帯に於ける原始的経済生活の秀でたる姿を描写しているのである。「産業的進化的経済以前の段階」の、是等の現実に即する記述は、文明の黎明に一步先立って、巧みに経済学及び人類学の王位たることを目立たしめている。其の第三節に於いては、見事に且つ簡潔に、生産者の消費者に属する産業的關係に立脚して、家政、都府経済及び国民経済と云う、暗示的な序列を描写しているのである。第四篇は産業制度、即ち家内仕事、賃銀仕事、手先仕事、手数料仕事(家内工業)及び工場制工業の巧妙なる概観を提示している。第五篇の「手工業の没落」は、是等の諸篇とは部類分けされてもよいであろう。爾余の諸篇は一層特殊的に、個人及び社会の観点から、若干は産業

進化と云う、大なる過程の観点から分析されるのである。即ち聯力と共力、分勞、新聞によつて影響されたものとしての、社会の智的集化、社会階級の構成、人口の国内移住による労働の、今後の適合等の諸篇から成り立っているのである。同時に是等の諸篇は、多数の、効驗ある表現を伴う処の経済学上の術語を豊富に含んでいる。

「理論の最も悪い使い方は人々をして事実を知覚せしめない様にするのである。」と、アクトン卿 (Lord Acton) は「英国歴史評論」(English Historical Review)の創刊号に於いて注意したのであった。吾人の著者は其の詳細な事実の蓄積を以て、又其の鋭敏な分析と、而して其の包括的な又清新な概括とを以て、如何にして此の魔道を避けしむ可きかを知らしめたのである。彼の歴史的態度は我が國の若い経済学者達は英国及び亜米利加へ行くよりも、むしろ露西人、羅馬尼人及び南斯拉ヴ人の方へ目指す研究調査旅行へ送らる可きであ

ると云う、彼の助言によく暗示されていると思う。其の現在の形態第一集に於いては独創の賞讃す可き文章を全然塗抹していない処の、以下の諸頁に於いて、彼の注意は勿論社会上の及び其の他の考察に向けられたとす可きよりも、むしろ主として経済学に捧げられているのである。

此の書物は独逸に於いては、非常な影響を以て流布するに至り、又近頃仏蘭語、露西亜語及びポヘミヤ語にも翻訳されたのである。此の書物の序言にも注意している通り、之は「経済学的に物事を考えること」(economic thinking)に対する一般の手引として、広汎な役目を果して来たのである。本書を此の目的の為に使用することは、特別に転写すると云う媒介を通して、既に若干の並米利加の大学でも注意されて来たのである。此の希望は其の功績が今や更らに一層広い認識を受けるであろうと云うことを許すかも知れないのである、而して幾分か一八九五年から九七年に互つて原著

者の講義に二年間出席したことによつて、筆者に感ぜられた刺激を読者に伝えるかも知れないのである。」
以上に掲げた拙訳は、トロント大学の政治経済学及び統計学の講師たりしエス・モーレー・ウィッケット(S. Morley Wickett)が其の英訳になる、ビュヒアー(Bücher)の「国民経済進化論」(Die Entstehung der Volkswirtschaft)第一集の巻首なる訳者序文中の概要である(Industrial Evolution by Carl Bücher, translated from the third edition by S. Morley Wickett. New York, 1901.)
今ビュヒアー(Bücher)の学説と云う様な、極めて茫漠たる論題を処理するに当り、論稿の範囲の逸脱を防ぐ便宜上、此の英訳者の原著者観を骨子として筆を進めて見よう。

先ず筆者が特に興味を浚られたのは、シュモラー(Schmoller)との比較が為されている点で、原著者の学説をシュモラー(Schmoller)の其と稍々類似していることが指摘されているのである。正統学派、自由主義学派、演繹学派、「マンチェスター」学派等の名称の

下に知られている英国伝来の経済学派に対して起つた当時の、安逸の新学派であつた歴史学派(Historical School; Historische Schule)は、ウィルヘルム・ロツシヤー(Wilhelm Roscher)、ブルーノー・ヒルデブランド(Bruno Hildebrand)及びカール・クニース(Karl Kries)の三人を主として創始されたのである。而して是等の三人及び当時の安逸学者を旧歴史学派と称し、之を新歴史学派と區別することが常である。新歴史学派とは主としてグスタフ・シュモラー(Gustav Schmoller)を中心とする学者を総称するのであるが、此の區別はシュモラー(Schmoller)の全盛時代に於いては多少意義もあつた様であるが、今日にあつては殆ど無用の區別なることを認めざるを得ないのである。新旧歴史派の何れに属せしめて可なるや、其の分明ならざる学者極めて多数存する中に、独りシュモラー(Schmoller)が歴史派の間にあつて一新面目を着けていることは、争う可からざる事実であらう。彼はロツシヤー(Roscher)

が為さんと志して終に遂げ得なかつたものを着々実行し、拔群の世才、絶倫の勢力、該博の知識を以て独逸経済学の総師たるの地位を占めるに至つたのである。然し「マンチェスター」学派が英国正統学派の説を極端にまで推し進めて幾多の弊害を招いた如く、シュモラー(Schmoller)は其の歴史主義(Historism; Historismus)の為に多くの病所を露出したのである。

ここでシュモラー(Schmoller)から「ビュヒアー(Bücher)へ」と思想的展開を考察するに当つては、後者が前者の缺陷、短処として之を衝いた歴史主義に一顧を支えなければならぬであらう。抑々歴史主義とは一切の事物は歴史の生成過程にあるものと考え、従て真理、価値等も歴史の過程のうちに現はれるとする主義、主張を云ふのである。換言すれば、総て歴史的なものに価値や意義を認め様とする立場を指して歴史主義と称するのである。此の主義が特に安逸に於て盛んになつたことは、第一九世紀、同国にあつて、浪漫主義、歴

史学派、古典主義、文献学等によって主張された歴史観に基因するのである。真理の規準を歴史的なものと考へ、以て歴史的なものに価値を認めようとする歴史主義には、結局に於いて歴史の相対主義に陥ると云ふ批判が十九世紀末加えられる様になり、かくて二〇世紀に入つては反歴史主義の主張が有力となつて来たのである。然し一方に於いて近代人に取つては、人間社会一切のものが歴史的に変化するものであると云ふことは、疑ひ得ない前提となつてゐるのであるから、歴史主義の観点に立脚しつつも、而かも一方で相対主義に墮することを避け様とする思潮が起つて来たのである。かくて経済学の領域に就いて見れば、其の歴史学派に反動して起つた壞太利学派は、史的叙述に代ふるに理論の探求を以つてしたが、其の理論は歴史派の後に於ては出来るだけに、其の以前の自然科学的理論に反することは出来ずして、主観価値説を中心とした特色を發揮したのである。かかる学問的風潮の変転に際会し

たビュヒアー(Bücher)としては、歴史学派に属しつつも、其の研究方法来に心理学的色彩を多分に織り込むことによつて、歴史主義の相対主義に陥る缺点から脱却しようとする試みなのである。これ拙稿の初めに引用したモーレー・ウィッケット(Morley Wickett)が、氏の学風の特徴を捉えて、「経済理論の、彼の取り扱ひ方に於いては、彼は歴史学派と心理学的な壞太利学派との中間に立脚した。」と論評した所以であらう。然らば其の心理学的研究方法は、如何なる方面に於いて見られるのであるか。今此の問題に解答を与えるために、其の主著である「国民経済進化論」(Die Entstehung der Volkswirtschaft)の中の、原始時代の経済状態に関して説ける、若干の個處を次に摘録して見よう。

従来の経済学は何れも、人間には他の生物に存せざる「経済性」(wirtschaftliche Natur)なるものを固有してゐると云ふ假定から出発してゐる。而して其の経済性と云ふ假定から、欲望の充當を目的とする處の、人

間一切の行為を支配する一原則、即ち所謂經濟原則（經濟主義）なるものを演繹して曰く、人間は何時如何なる処でも、最少の費用を以て最大の充當を得んと努めるのである（最小手段の原則）と。

此の原則に従えば、人間の、総ての經濟行為は目的意識し、価値判断に依つて指導せられる行為であることを假定するものである。經濟も其の最終の原因を探求するならば、其は常に本能生活（自己保存及び利己本能）に歸し得るかも知れないのである。然し此の本能の充當も、心的活動の継続によつてのみ行はる可きものと云はざるを得ないではないか。即ち人間は其の一度起つた欲望を充當せしめざる場合には、如何程の不愉快が生じて来るものであるかを、其の不愉快の大きさを計量し、次に其の欲望の充當に必要な財貨を作り出すとすれば、其より生ずる労働に伴ふ不愉快の度が幾何であるかを計量するのである。斯くして此の二つの不快の感じを比較し来り、其中で不快の比較的小

なるものを選ぶのである。即ち労働によつて生ずる犠牲が、不充當の状態より起る犠牲よりも小なる場合に於いてのみ、労働に従事せんとする決心を起すものである。而して其の労働を選ぶに當つても、更らに其の實際考え得可き種々の手段の中で、困難の最も小なるものを選ばんとするのであるから、此処にも亦計量、評価、比較、判断と云ふ順序が行はれるのである。

実に従來の經濟學說の総ては、斯かる假定の下に立つてゐるのである。即ち一切の經濟行為は此の假定に合理的基礎を有し、高尚なる精神能力を要求する行為なりと説き、従つて經濟學は一種の經濟心理学を構成することとなり、以つて模形的過程を律して、彼の經濟行為を説明せんとする様になるのである。従つて經濟は人間に特有なるものなりと言はざるを得ざるに至り、動物も亦經濟を営むやと云ふが如き問題は、到底起り得可くもなかつたのである。實に彼の本則によれば、經濟性は絶対的の或るものにして、人間の本性よ

り分離し得ないものとなるのである。

然し従来の経済学者が、其の行為よりして彼の所謂経済本則なるものを演繹し来れる文明人の間に於いてすら、彼の経済性は人各々其の烈度を異にしてゐることは、多数の観察によつて立証されてゐる処である。

即ち勤勉な者と懶惰な者、細心な人と軽卒な人、節約者と浪費者、是等両極端の中間に於いては、所謂経済性なるものには、無数の段階が存在してゐることを認めなければならぬのである。今物に対して、之を破壊することを以つて愉快なりとする幼児の態度を観察するならば、彼の所謂「経済性」なるものは、各人個々に日々新たに習得されて行くものであつて、其は各人に対する教育、慣習の結果であり、従つて各人各様に其の心身の発達が異なる如くに、其の経済的本性なるものにも亦、著しい程度の相違が存することは、容易に之を認め得るであらう。

かく考察し来れば、彼の「経済性」は人類には生得

るものに非ずして、習得の結果ではなからうか。又人類進化の初期に於いては、吾人が動物に就いては常に仮定してゐる様な、純本能的の欲望充当時代が幾千年を継続してゐるものと考へることが、果して妥當を缺いてゐるか否か、かかる疑問は一顧直ちに提起せられ得可きものであつて、再三再四熟考して始めて生ず可き程のものではないのである。

此の疑問に対する解答は、唯経験的方法に訴えてのみ得らる可きものであつて、原始人に就いて吾人が頭裡に描き出す可き像は、彼の古典派経済学の採用する演繹法の中に屢々出て来る様な、故意に構想されたもの、即ちロビンソンクルーソー譚式の如き怪異なものであつてはならないのである。其の原始人に就て考へる処の、一切の特質は、之を實際に接して得來つたものでなければならぬ。而して此の原始人の特質は、彼の文化を欠ける人類の生活しつつある實際的条件を示し、彼等が先ず以て行動し、而して後に思惟する所以

の動機を明らかにするものあるに相違ないのである。

思うに彼の演繹的方法なるものは、此処に述べる様な帰納的方法に比すれば、容易であるに相違ない。一体文明人なるものは、自己に固有せる見解や感じを以つて、之が原始人の精神中にも存在している様に見ようとする傾向が強いが、彼等文明人の能力は尙お極めて貧弱であつて、彼の原始人の發達せざる精神生活を充分了解して、其深底を解明せんとすることは、到底望み得可からざる処である。」(K. Bücher: Die Entstehung der Volkswirtschaft. I. 18. Aufl. S.)。

「斯かる原始状態にある人類を長期に互つて観察して来た欧羅巴人は、よく彼等原始民族は譬え様もない程に愚鈍であつて、又思考に懶く、崇高なる自然の現象に対して没交渉なるかの如き態度を採り、自己以外のものに対しては全く無関心であると、語っているのである。思うに未開人は唯食わんと欲するのみ、而して天候の変異に対しては自己を護るに必要な物が備わ

っているならば、唯眠らんと欲するだけであつて、彼等の、人生の目的の全体は、之に外ならぬのである。」(Entstehung der Volkswirtschaft. I. S. 13.)

「故に動物の営むと同様のこと、即ち生命を維持すると云うことが、又自然人の標準的本能である。而して此の本能たるや空間的には一個処に限り、時間的には欠乏感覺の生じた瞬間に限る。換言すれば、未開人は唯自己をのみ考え、現在をのみ思うものである。而して其の自己を超え、現在を絶しているものは、彼等の精神に取つては、全く無関心の状態に止まるものである。故に多数の観察者は、彼等の限り無き利己心、同族に対する冷酷、貧慾、盗心、懶惰、将来に就いての顧慮なきこと、健忘性等を非難するに至つたのであつて、之れ同情、記憶、推理なるものが、尙未だ全く彼等の間に發達していないことに由来するのである。斯く観来れば、今此処に財界に対する彼等自然人の態度を解釈しようとするならば、是等の性情から出發せん

」とを要望せざるを得ないのである。（K. Bücher: Volkswirtschaft. I. S. 14-15.）「Entstehung der

「斯く觀察し来れば、吾人は此処に彼等自然人の間に極めて広く行われている懶惰の習慣を非難し得ないことになる。然し今一步を退いて考うるに、觀察者が以つて懶惰なりと思ふことも、之は彼等に先見の明なく、徒らに刹那に生きていることに由来するを知るのである。彼等にして其の欲望充当され、飽満になれば刻苦精勵する様な苦しみを為さないのである。然し彼等は決して労働せないと云うのではない。実に彼等は一般に貧弱なる道具を使用し、尙お且つ文明人に比して敢て遜色のない労働を営むことも稀有ではない。唯其の異つているのは、其の労働が規則的のものではなく、又規律立つた時間に行うものではなくして、欠乏が彼等を強要し、又は興奮している情調が勃興した時に飛躍的に、一気呵成に遂行する点にある。而かも真面目なる生活問題としてよりは、寧ろ遊戯半分として

之れを行うの点に存するのである。

一般に彼等自然人は常に最も手近かな刺激にのみ従わんとするものであつて、彼等の行為は突に純然たる衝動に基くのである。否な單なる反射運動たるに過ぎないのである。欲望と其の充当との間の距離が益々接近し来れば、彼等は愈々喜ぶのである。自然人は子供である。彼等は将来を考えず、又過去を顧みることなく、彼等は万事を忘却する。新らしい印象は、常に過去の古い印象を逐うのである。如何程苦しい、生活上の困難も、彼等の精神の快活な根本情操を、假令一時的たりとも、攪乱することは出来ないのである。（K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. I. S. 21.）

然るに土人にして永く欧羅巴人に使役されているものは、其の快活な性質を失い、陰鬱なる性格に変ずる様になる例が極めて多いのは、注意す可きである。フリッチ（Frisch）は此の事を説明し、其は彼等が其の主人よりして、漸く将来に就いて顧慮せざる可からざ

るの習慣を得る様になつたが、又一方では彼等の感情は、かかる顧慮を伴う仕事に到底適応し得ない為めであると解釈しているのである。

斯くの如く利那に生きる、彼等の生活は、判断と未
來の觀念とを前提としている価値觀念によつて、決して乱されるものではないのである(中略)。然し他の方面より見れば、彼等の貪慾は殆ど飽く処を知らない有様である。未開種族を招いて饗応をなす場合、其の酋長等の眼に好物として映じたものは、何でも之を得ようとして、悉く掠め去つて行くことは、旅行者の常に発する歎声である。之れ亦、彼等未開人の素朴的な利己心と、無限なる貪慾の表われと見る可きである。然し是等の現象を目して經濟を営む文明人の營利心と同じものであると解するならば、其は甚しい誤見であろう。彼等野蛮人の行為の基準となるものは、常に利那の印象のみであつて、今を距てているものに対しては、少しも之を顧みることがないのである。彼等は真

に同時に二つの思想を並列せしめ、以つて是等を比較計量することが出来ずして、常に唯一つの思想にのみ支配せられ、強い断案を抱いて之を追求して行くのみである」(K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft, I S. 32)。

以上原著者の、自然人の經濟状態に関する考察を數個処に互り引用紹介したのであるが、是等を括約するものとして、次に經濟の概念とは正に相反する概念を原著者は如何なる点に求めているかを述べ、以つて其の經濟に対する考察が如何に心権的色彩に富んでいるかを示すであろう、「而して斯かる状態(筆者註 前段よりの、野蛮人の經濟状態を指す)が真に經濟の正反対を意味するものであることは、吾人が知っている処の一切の事柄からして、之れを断定し得るのである。蓋し經濟とは常に財貨準備と云ふことによつて生じた処の人類の協同である。經濟は節制であつて、單に眼前の事象に対する顧慮のみならず、又將來に対する心懸

けである。節約せる時間の分割である、合目的なる時間の順序である。即ち経済は労働と、物の価値と、其の消費の節約と、財産蓄積と、文化開発の物資を子孫に伝承せしめることを意味しているのである。而して是等一切のことは、之を彼の比較的進歩した自然民族に就いて求めようとしても、到底不可能であるのは、多数経験の一致する処であろう。更らに之を野蠻最下層の民族の間に求め様としても、其の萌芽をすら認め

ることが出来ないのは当然である。今若しブッシュマ
ン族及びヴェツダ族の生活から、火及び弓箭の使用を除き去るならば、其処には個人的食料探索より以外の何物をも残り得ないであろう。彼等の各人は全く孤立無援であつて、赤裸に何の武器も携帯することなく、其の仲間と共に狭い地域を逍遙する状況は野獸と何等異なる處なく、兩足を手と同様の軽快さを以つて働かしめ、以つて物を攫み、木に攀じ登るのである。男女を問わず、手で捕え、又は爪を以て地中から掘り出した

下等動物、球根、果実を生そのままで食するのである。彼等は時には集合して大小の群を形成するかと見れば、又時には分れて四散するのである。之は牧場、又は獵場の豊饒性如何に依存するのである。斯くの如く、時に聚団を形成することがあつても、其は決して強固な共同体を形成している訳ではないのであつて、之は斯かる一時聚団が決して彼等各自の生活の負担を軽減するものではないからである。

上述し来れるが如き描写は、固より今日の吾人よりすれば、直ちに之を承認することは出来ないであろう。然し比較研究より得た処の結果は、斯くの如き描写を構作するの余儀なきに立ち至らしめるのである。然し此の描写に今日直ちに接し様とすることは、早計である。今日野蠻最下級と呼ばれている民族と雖も、実は既に或る幾多の進化の過程を経過しているのであつて、吾人は彼等の生活から文明的要素なりと評し得る武器と火との使用を除去して構作したものが、あの

原始的狀態であつたのである。斯く今日に於いては、真に野蠻最下級の民族なるものは存在していないのであるが、而かも比較的開化している自然人の間に於いて、尙お且つ極めて多数の非経済的なことか行われて居り、彼の経済主義を意圖的に応用すると云うことが常に原則と云うようも、寧ろ例外に属することを認めざるを得ないのであつて、所謂低度の狩獵民及び上述の、其の先驅者の間には、経済と云う概念は之を一般に適用し得ないことになるのではないか。かく觀來れば吾人は遂に、彼等が尙お未だ経済なるものの發生せなかつた処の、経済以前の進化段階に到達しているものなることを、推斷せざるを得ないのである。若し強いて此の段階貸稱呼を付するならば、私は之を個人的食料探索の段階 (die Stufe der individuellen Nahrungssuche) と称せんと欲するのである (K. Bücher : Entstehung der Volkswirtschaft. I. S. 26-7.)

以上、氏の原文を引用すること稍々繁多に過ぎた様

であるが、是等の引用個処からも分る通り、其の経済の概念は概めて心理的色彩に濃厚である。個人的食料の探索時代なる名称を付与した後に、氏は更に続けて、「此の個人的食料探索の時代から、如何にして経済なるものが發展して來たかは、今日にあつては之を推測することは、決して容易な業ではないのである。然し直ちに消費し尽さんがために天産物を獲得することの代りに、距れる目的を目指す生産が行われ、本能的の身体活動の代りに、目的を意識する体力の使用、即ち労働が発生するに至つた時こそ、段階転化の一機であつたであろうと推斷するのが、最も至当な考え方ではあるまいか。」(K. Bücher : a. a. O., S. 27) と論じているのを見て、其の考察方法が、経済の發達を心理的に考察した学説の中で最も重要なものとされているカール・ラムプレヒト (Karl Lamprecht) の其と殆ど同巧異曲であることが認められるのである。ラムプレヒト (Lamprecht) は夙に経済現象を心理的に考察すること

の必要を認め、欲望と之が充当との関係を捕え来つて、此の間に存する心理的緊張(die psychische Spannung)を以つて経済発達の根本的事実とし、此の緊張の程度と、之を解除する手段の発達とを標準として、経済発達の間を説明したのである。其の所謂第一期は右の心理的緊張の存在せない原始状態であつて、此の時代には食物は殆ど衝動的に探究せられ、反射的に食い尽される状態であつた。即ち欲望の衝動と欲望充当との間には殆ど間隔はなく、仮令其の間に心理的緊張が存在しても、之が解除は全然反射的に行われるに過ぎない段階である。此のラムプレヒト(K. Lamprecht)の、欲望と之が充当との関係に就いての考え方は、ビュヒアー(K. Bücher)が財貨が生産者の手から消費者の手に至る道程の長短を標準として、其経済発展段階説を立定したのと、相類する処多く、両者は表裏二面の関係を有するが如くにも考えられるのである。然しビュヒアー(K. Bücher)の考え方がラムプレヒト(K. Lamprecht)の其と本質的に異なるのは、後者が経済現象を終始一貫して心理学的に解釈したの対して、前者は史的考察を主眼とし、唯之に添るに心理的解釈を交錯せしめた点に求めなければならぬ。其は氏の所謂個人的食料探索時代の特徴を叙述し終つて、「本能的の身体活動の代りに、目的を意識せる体力の使用なる労働が生ずるに至つた其時こそ、時代転化の秋であつたろうと思うのが最も想到し易い考え方ではあるまいか。」と一応結論とも思われる様な断案を下して置き乍ら、(K. Bücher: a. a. O., S. 27)、「直ぐに之に続けて、「然し実は其は唯純理論的な断定たるに止つて、何等吾人に利する処がないのである。思うに自然人に於ける労働程、臘ろげなる、怪しい姿を有するものはなく、愈々其の本源を追究して行くならば、遂には其の形式より見るも、又其の内容から考えても、益々遊戯に近いものと化して来るのである。」と論じているのである。(K. Bücher: a. a. O., S. 27) 斯くて此の事情を例証せん

として、自然民族の間に於る幾多の事例を引用して、

やがて次の如く記述している、「かるが故に、技術は遊戯といふことから由来して、遊戯的なものから漸次効用あるものへと推移するに至つたのである。斯くて従来学者の考えていた処の進化の順序は、正しく實際とは反対に立つ空論となり「遊戯は労働よりも古く、

芸術は経済的生産に先立つ」ということを此処に言わざるを得ないことになつた。彼の高等なる自然人の間に於いては、其等労働と遊戯と云う、二つの要素は、

既に相互に分化しつゝあるけれ共、而かも尙お彼等が重要な労働を営まんとするに當つては、必ず先ず舞踊し、而して後に労働するか、若しくは舞踊しつゝ労働するのである(戦舞、狐舞、收穫踊)。更らに歌いつゝ労働することが、普通とされているのである(K. Bücher: a. a. O., S. 29)。

之と同様な論旨は氏の、別の著作である「労働と律動」(Arbeit und Rhythmus)の結論として設けられた、第九章の「経済的發展法則とし

るの律動」(Der Rhythmus als ekonomisches Entwicklungsprinzip)の最後にも、次の如く展開されている。

「吾人の今日の生活に於いては、其の太古的な共働から吾人が出発せねばならぬ諸要素が、既に相互に遠く懸け離れていて、吾人は其の緊密な交互関係を、何処でも正しく把握し得ると云う訳には行かないのである。芸術と技術とは、其の職業的な形態に於いては、今は甚だ異つた方途を歩んでいるのである。特に動く芸術(筆者註・舞踊、遊戯を指す。)は科学及び技術の習練に對しては、今日では最早何の關係も有していないのである。而して労働者の生活に於いては、其は又殆ど何の役割を演じていない。之に反して静止の芸術(筆者註・絵画、彫刻を指す。)は久しい以前から再び技術と結合せんと努めているのである。是等兩者の有機的結合は、大多数の領域に於いて殆ど除外されているのである。

此の点では個々人の生活は、貧しい、無趣味なものになつてゐる。労働は彼に取つては、最早や音楽であ

り、同時に詩であるところのものではなくなつてい
る。市場向の生産は最早彼に、自家用の為めの生産に
於けるが如くに、個人的な名誉と名声とをもたらさな
い。此の市場向生産はダース物を要求し、個人的、芸
術的嗜好を少しも認めないであらう。芸術はペンに頭
を屈して了つたのである。職業的に形成された活動は
朗な遊戯でもなければ、又愉快な享樂でもなくして、
真面目な義務であり、而して屢々苦痛な禁欲である。

然し之と並で、是等の全体が此の發展過程に於いて獲
得した処のものを看過してはならないのである。技術
と芸術は、分化と分業とによつて、夢想だもせなかつ
た処の、高度の能率にまで発達し、労働は一層生産的
となり、吾人の経済財の装備は又一層豊富になつたの
である。而して技術と芸術とが、他日精神には幸福な
清澄を、又肉体には自然民族の間の、最良のものを抽
んでしめる調和のとれた完成を回復する処の、一層高
い律動的な統一を括約し得るであらうと云う希望を放

棄してはならないのである。] (K. Bücher: Arbeit und
Rhythmus. 3. Aufl. S. 420~21.)。此の引用文からも分る
様に、氏は飽くまで経済現象の考察に發展史的見地に
立脚しているのであるが、然し又一間に於いて、経済
現象を心理学的に解釈していることも認められるであ
らう。而して此の史的考察と、心理的解釈とが最も密
接に交錯、閏聯していることが認められるのは、其の
消費生活に就いての見解である。先ず人類の消費生活
が史的に發展する現象なることを断定して次の如く述
べている、「経済なるものを、民族の進化に溯つて往
古に及ぼして行くならば、遂には非経済なるものに化
し去るが如く、労働も之を其の原始に溯らしめるなら
ば、遂には其の反対である非労働（遊戯）となり終る
ものである。尙お其の他の重要な、一切の経済現象
に於いても、斯くの如き探求を続けて行くならば、恐
らく同様な結果に到達するであらう。而して其の中に
あつて、唯一つ承久にして、不変たるものが存する。

之れ即ち「消費」である。蓋し人類には何時、如何なる処に於いても、欲望を生じ、而かも之を充たさざるは、其が経済的に表われて来る範圍に於ては、自然的に前定されているものには極めて小部分に過ぎないのである。即ち自然的必要よりして生ずる消費と云えば、其は唯食物に関するもののみであつて、其の他に至つては総てが文化の所産、人間精神の自由なる創作的行為の結果である。而して之が無ければ、人類は永久に球根を掘り返し、果実を採求する動物の状態を脱し得ないであらう。」(K. Bücher: a. a. O., S. 29.) 此の

引用文から見れば、食生活以外の、人類の消費生活は、史的発展の結果に帰するものであるとされているのであるが、更に消費其自体に関する、氏の考察には、極めて心理的解釈に濃厚なことが認められるのである。

今之を論証する為めに、「国民経済進化論」第二集の第九篇に収められた「消費」と題する論稿の中から、

若干の個処を次に掲げて見よう。

「企業の財産は常に新なる貨幣の形態を採らんことを努め、若し企業が正常な経路を辿るならば、其の額は増加するが、使用財産は若し其が利用財であれば、其の静止状態に於いて保持され、其が貯蔵品であれば、不断に減じ、野蛮人は死者を埋葬するに當つては、其の人が生前に愛用していた持物を一緒に埋める風習があるが、文明人は常に一部分は、其の先代から伝承された物で間に合している場合が多いのである。

斯く見れば、利用財の使用期間を出来るだけ延長しようとする傾向ありとす可きも、事實は必ずしもそうではなく、生産技術及び流行心理は寧ろ多数の財の利用期間を短縮せしめつつあり、斯くして大抵の消費に於いては、利用財産の部分が貯蔵品へ接近するのである。」(K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft, Zweite Sammlung, S. 328—29.)

「次に転じて本来の消費、即ち享樂消費を考察する

に、此処に若干の難かしい問題に遭遇するのである。凡そ経済学上の問題にして、倫理学及び心理学上の問題と接触すること、此処に於けるよりも著しきはなく、吾人が人生の終局の目的を享樂に置くか、又は總ての力の完成、調和的發展及び活動に置くかによつて、消費の諸現象に関する解釈も、自から異らざるを得ないのである。

總ての人間の行動は享樂を得、苦痛を避けんとする動機によつて決定されると説く人々は(快樂説)、消費現象を科学的に分析するに當つても、著しく簡單となり、彼等は享樂を一つの数学的理論にまで築き上げ、人間の享樂は其の一生涯を通して、此の享樂の合計が最大となる様に配列されなければならぬと説くのであるが、實際の問題としては、殆ど適用され得ないのである。

之に反し活動主義を奉ずる人々は、消費に遙かに複雑な原因を認め、彼等は利己的動機以前に、又利他的

動機的作用を説き、凡そ人間の經濟行為の中で、消費の領域に於ける程、社会倫理的の判断標準に基くもの他に無しとするのである。実に浪費、貪欲、贅沢、節約、知足、恵与、寄食等の諸概念は、總ての時代に於いて経済学上の概念たらずして、主として倫理学上の概念であつた。』(K. Bücher : *Entstehung der Volkswirtschaft*, II, S. 334-35.)

「消費の客觀的尺度を決定することは、其の主觀的尺度を決定することよりも、遙かに容易である。凡そ所得は是に應じて決定される大さであり、其の所得を越えて浪費する者は、彼の經濟の基礎を侵害することになる。

消費の主觀的尺度を確定することは、遙かに困難である。凡そ人間の欲望の範圍は、氣候、土地の習俗、文化の程度、社会上の地位、個人的な生活の職能及び人生觀等によつて著るしく異なるものであり、人間は其の欲望を充當する為めには、消費財の色々の種類から

構成された組合せを必要とし、此の欲望圏を云わば同心円によつて種々要度の異なる欲望群団へ分解し、此処に生活の必要、文化及び資沢の必要なる諸概念に到達するのである。然し是等は何れも比較的の大きであつて、同一の収入と消費の等しい貨幣価値に於ける農家と官吏との消費必要は、是等三つの群団へ序列して見れば、分るのである。生活の必需品は種々の教養階級の人々に取つて、又色々の国民性の労働者に取つて、量及び質の点で少しも同一ではなく、又資沢の概念に固着するものも流動的、不確定、時及び処によつて異るが、唯問題として何が浪費なるかは、疑い得ないのである。(K. Bicher: Entstehung der Volkswirtschaft II, S. 339-40)。

以上数個処に亘る引用によつても分る通り、氏が経済現象を理解するに當つては、心理的考察を多分に加えていることが認められるのである。此の点も氏の学説の一特徴として、挙揚せなければならぬであらう。

次に氏の学説を検討する際に、当然取り上げなければ

「國民経済進化論」の根本思想(淡川)

ばならぬのは、其の経済発展段階説の立て方である。財貨が生産されてから消費されるまでの販路の長さを標準として、経済の発達を大観し、封鎖的家内経済、都市経済及び国民経済の三段階に區別する、氏の学説は、多くの経済発達段階説の中でも特に有名になつて居り、内外の経済原論、経済史概論が、其の経済発達を説くに當り、何れも引用又紹介する処である。経済原論の類書中、其の論旨の厳正、其の叙述の簡明の点で、白眉とされている、フックス(K. J. Fuchs)の著書にも、其の第一節に国民経済の発達を説くに當り、特に氏の段階説を其のまま引用して之を説明していることに見れば、其段階説が安逸の学界に於いても如何に重視されているかが、分るであらう(K. J. Fuchs: schaftsthe. 5. Aufl. S. 30-31)。

以下其の発展段階説に就いての、若干の特徴を考察して見よう。

先ず第一に問題とす可きは、氏は其の考案になる処

の封鎖的家内経済の段階、都府経済の段階及び国民経済の段階、是等三つの時代の外に、尙お経済発達以前の状態として個人的食料探索の時代（die Stufe der Nahrungs-）なるものを説いていると云うことである（K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. I. S. 26-7.）

此の段階に於いては、各人は自己の肉体以外に、何等の武器、道具も有せず、或る種の獣類と等しく、同類と共に一定の地域を放浪し、手及び足を巧みに使用して、物を捕え、樹木によじ登り、小動物、草根木皮を採取して之を食料に充てるのである。而して彼等は食料獲得の爲めに大小の群を成し、時に又分散することもあるも、未だ一定の社会を形成するに至らず、唯個々に食料を探索する生活を営んでいるに過ぎないのである。而して如上の原始状態は、現実存在している処の自然人の、最も幼稚な生活状態を描写せるものではなくして、其の生活状態の中、最も原始的な生活方法によつて生じたものと考えられる諸般の特徴を綜合し、

以つて今日の自然人よりも更らに一層遡つた原始人類の生活状態を、思想上構成したものである。氏が何故に其の三つの時代以前の状态として、かかる段階を特設したかの点であるが、此の個人的食料探索の時代なるものは、人類は元より個々の経済行為を営んでいるが、是等の行為たるや一定の秩序計画によつて支配されていぬ段階であるから、未だ経済なるものを形成するに至らなかつた時代であつて、原始経済状態と云わんよりは、寧ろ原始非経済状態とも称す可き段階である。然し氏の学説の根底的思想を為す進化の立場よりするならば、此の時期を以つて其の経済発展段階説の第一段階として考えなければならぬであらう。前に引用した処の、氏の論旨を此処に再び示すならば「経済なるものを、民族の進化に溯つて往古に及ぼして行くならば、遂には非経済なるものに化し去るか如く、労働も之を其の原始に溯らしむれば、遂には其の反対なる非労働（遊戯）となり終るものである。尙お其の他

の重要な一切の經濟現象に於ても、この様な探求を続けて行くならば、多分同様な結果に歸して仕舞うであらう。」と述べつゝ、(K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft, I, S. 29.)

而かも又一方で、「斯くの如きの事情よりして、吾人は個人的食料探索時代が終つて、經濟が始まるに至つたと云う、一定の段階を区劃することの、極めて困難なるを信ぜざるを得ないのである。凡そ人類進化の歴史には、轉化点の如きものが存在している訳ではない。一切の現象は草木の如く、萌え出でては何時の間にか萎行つて仕舞うのである。『斯の如きものよ』と説きつつも、実は自然と人間界との奇蹟を、吾人が鈍き眼に解しよからしめん為めの抽象に過ぎないのである。經濟にあつても何等之と異なる処がないのである。」(K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft, I, S. 30.)と続けられているのを見れば、其の個人的食料探索時代なるものを考案したことの重要さが、了解されるであらう。然るにフックス

(K. J. Fuchs) 教授が此の段階説を引用、紹介した際に、個人的食料探索時代に少しも触れなかつたことは、甚だ遺憾である (J. Fuchs: Volkswirtschaftslehre, 5. Aufl. S. 31.)。之について發展した、最初の經濟段階は、即ち封鎖的家内經濟である。故にビニヒアー(Büchel)の經濟發達の階段として通常考えられているものは、前述の家内經濟以下の三段階であるが、然し其の抱懐する進化思想よりすれば、個人的食料探索時代を想定した意圖を重視せなければならぬであらう。

既述の如く、個人的食料探索時代には、人類は元より個々の經濟行為を営んでいるが、是等の行為は一定の秩序計劃によつて指導されたものではないから、經濟とは云い得ないのである。而して經濟が初めて現われた経過を説明して、次の如く述べている、「其の初めて歴史に現われるに至るや、經濟は或る一定の行為の規範によつて指導される処の、物質的の共同生活体として現われ来るものにして、此の生活共同体は家族

と云う人的道德的の生活共同体と密接なる關係に立っているのである。斯くの如くにして、此の家族なる形式の下に、人類は初め其の經濟なるものを考ふるに至り、以つて其の本質に應ずる名称を確定することとなつたのである。即ち中古高地独逸語に於いては、ヴェルト(Wirt)と云う言葉は尙お「実父」と同意義であり、ヴェルティン(Wirtin)は「正妻」と云う意味を持っていたのである。又かの希臘語より由来するエコノミー(Oikonomie)なる言葉も同様にして作られたのである。

故に集合共同体に於いて、其の目的に適へる物の生産及び使用が、彼の經濟主義に準拠して行われた処、其処に經濟の事實の存在しているのを推定し得るのである。而してかかる状態は、高等なる自然人の間に於いては、既に之を認めることが出来るが、大部分は尙お個人的食料探索時代なる、經濟の前段階を思わしめるものが残存して、經濟なるものは此処彼処に漸く擡

頭し来るに過ぎないのである。」(K. Bicher: Entstehung der Volkswirtschaft, I.)。之が氏の所謂「封鎖的家内經濟」(geschlossene Hauswirtschaft)の段階であり、又「經濟」其のもの概念決定でもある。自己生産を行い、交易無き經濟であり、財貨は一つの經濟單位に於いて生産せられ、而して消費されるのであつて、何等財貨の流通を見ざるもの、之が「經濟」の本源なりと説くのである。而して此の段階は前にも引用した如く、高等なる自然民族の間に於いて認められるのみならず、又所謂古典民族にあつても同様であつたと説くのである。此の点に関する氏の所見は次の如く記されている、「希臘人、カルタゴ人、羅馬人の經濟は實に此の種のものに屬していたのである。ロードベルトゥス(Rodbertus)は此の時代を称して『家産經濟』(Oikowirtschaft)の時代と呼んでいる。蓋し當時は家(Oikos)なるものが經濟制度の單位となつていたのである。即ち家は單に住宅のみならず、又共同經濟を行ふ人の團體たるを

意味し、之に属するものは所謂『家族仲間』(ceteris)と呼ばれていたのである。此の *stetur* と云う言葉は言語の歴史的用法よりすれば、其れ自体に於いては當時一家の労働一切を負担していた処の経済的奴隷のみ意味するものに過ぎなかつたのである。羅典語の *familia* と云うのも、之に類似せる意味を有し、*famuli* (家奴、婢僕) の総体を指示するものであつた。 *pater familias* と云うのは奴隷の主人公と云う意味であり、経済の総所得は其の手中に収められたのである。又、*patria potestas* と云うのは夫権及び父権を奴隷所有者の主宰権に概念的に融合したものであつた。家族各員は決して自己一身の為に利を営むものでなくして、彼の *pater familias* のために働き、此の *pater familias* は実に何人に対しても一樣なる支配権を有してゐたのである。』(K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. I S. 98-9.)

此の奴隸制度は希臘、羅馬に於いて最も盛行し、是等の奴隸は耕作に従事するの外、穀物を挽き、家畜を飼

養し、布を織り、絲を紡ぎ、器具を作る等のことに従事し、奴隸の中は是等の作業を終身負担し、技術上著しい発達を遂げたものがある。而して是等の奴隸は家の従属者として、其の家のために働いたものであつて自己の為に生産するものではなかつた。家長が家を代表し、之が財産を管理し、家に属する者の行為を監督し、以つて家族經濟の存続を計つたのである。羅馬に於ける、富裕な一家族は、其の仕事の種類から数えて、実に一四六種の奴隸があつたと云うことである。以つて當時に於ける家の經濟 (Ölkenwirtschaft) なるものが如何に大規模なものであつたかが、想像出来るであらう。

此の封鎖的家内經濟の次に來るのが都市經濟の段階 (die Stufe der Stadtwirtschaft) であるが、此の時代に於ては所謂応需生産 (Kundenproduktion) ではなくして、消費者生産 (Konsumentenproduktion) が行われ、財貨は生産者から直接に消費者へ移行し、此の直接

交換を特徴とするのである。地方的財貨交易 (lokaler Güterverkehr) の段階とも称し得るであらう。之に続く時代である、国民経済の段階 (die Stufe der Volkswirtschaft) にあつては、所謂商品生産 (Warenproduktion) 財貨循環の時代であつて、生産者と消費者との間へ一個の、又は数個の中間肢節が介入し、財貨は其が消費者に帰する以前に、是等肢節の手中を通過するのである。即ち国民的及び国際的財貨流通 (nationaler und internationaler Güterverkehr) の段階である。家内経済、都市経済、国民経済の三者は、唯生産消費過程の長短より見れば、何れも対等の地位を有する様であるが、ビュヒアー (K. Bücher) が之と対照せしめた名称である交換無き経済、直接交換及び財貨循環の三者に就いて考へるならば、第一期は自足経済の時代であり、第二期及び第三期は共に交換経済の時代であつて、第一期と第二期及び第三期とは本質的に異なるものなるを注意せなければならぬ。第一期の家の経済が漸次進化の

過程を辿つて、国民経済と云う、本質的に異つたものに化するに至つたと見る点に、氏の学説の根本理念を認めるのである。氏の所謂家の経済の機構は上來説いた処であるが、其の抱懐する、国民経済の觀念は、次の如くに展開されている。「国民経済とは一国民の欲望充當を目的とする施設、設備、手続の総体が、相集まつて形作るものである。此の国民経済は更らに多数の個別経済に分たれるものであるか、斯く分たれた個別経済は、何れも皆交換交通によつて相互に結合せられ、極めて錯綜せる關係に立ち、相互相倚り相扶けてるのである。」(K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. I. S. 85.) 而して之が進化の所産なることを説明して次の如く述べられている。「斯くの如く各方面に対して相互關係に立ちつつあるものなるが故に、国民経済は吾人の後に横わたれる文化発展の結果なりと云い得るのである。而して彼の特殊経済が其の私経済たると、又公経済たると、將た又其に直接従事している人員の大なると、小なる

とに論なく、何れにも変化すべきものなるが如く、此の国民経済も絶えざる変遷の渦中に存するのである。

又国民経済上の、一切の現象は、史的、文明的現象である。』(K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. I. S. 85.) 以上数個の引用文によって明かなる如く、氏によれば「経済」と「国民経済」とは、其の本質を根本的に異にするものである。而して「経済」が「国民経済」に進化するに至つた過程は、氏の多くの論稿の随処に展開されているが、其の最も明白に且詳細に述べられているのは、「国民経済進化論」第二集に於る「消費」(die Konsumtion)と題する論稿中の、下に引用する一節である。曰く、「個別経済に於ける消費の経済的整頓を家計 (die Haushaltung; die Oekonomie) と云い、現在の最高度に発達した経済にあつて、家計は一つの完全に独立した地位を占め、形式的にも又実質的にも、營利経済たる企業から分離し、之を経済全体として見れば、夫々独自の財産を持っている処の、二つの範圍へ分解し、是等の分

野は又夫々独自に財の出入、流通及び分配を有す。

營利経済は所得を創造す可き職能を有し、家計は所得を合目的に使用することが、其の任務であり、前者は企業の資本に、後者は家族の使用財産に夫々其の基礎を持ち、常態に於いては、營利経済の指導は男子に属し、家計の運営は女子の仕事である。營利経済は賃銀労働者を、家計は召使を夫々抱え、家計は一つの、支えられた結合体、即ち家族に依存し、營利経済は此の結合体を契約の方法で構成せなければならぬ。故に營利経済は其の運営に於いては、家計よりも遙かに自由である。若し營利経済が一つの独自の法的人格、即ち会社となれば、營利経済は家計とは夫々独立の最高度に達し、此の場合には兩者の間の、唯一つの、経済上の聯結は、營利経済は其の収益から所得を家計へ送り、此の所得は家計に於いて消費されるのである。家計と營利とが二分されたことは、或る一定の内的必要に沿うたものであり、其の必要は分業に立脚する

流通経済が初まると同時に与えられるのである。然し此処に注意す可きは、家計は歴史的に見て、比較的新しい現象であり、経済史に於いて溯ること、遠き程、營利経済と家計とは愈々密接に聯結されていたこと之れである。而して此聯結は遂に進んで、両者は共通の組成員を有する処の、唯一つの社会体を形成し、企業家、資本、賃銀労働者は存在せずして、唯家政者、家の財産、家人（奴隸）あるのみである。（K. Bücher: *der Volkswirts.*）氏の論調を其のまま借るならば、「経済史に於いて溯ること遠き程、營利経済と家計とは愈々密接に聯結されていた」ものが、現在では此の両者は完全に分離しているのである。而して斯く分離した両者を結合せんとすることが不可能であるとしても、此の間に処して如何なる考えを持す可きであるか、此の点に氏の経済に関する理念の特徴が存する様である。其の考え方は次に掲げる引用文によつて推知することが出来る、「此の点で個々人の生活は貧しい、

無趣味なものになつてゐる、労働は彼にとつては最早や音楽であり、同時に詩であるところのものではなくなつてゐる。市場向の生産は最早や彼に、自家用の爲めの生産の如くに、個人的な名譽と名声とをもちたらないのである。此の市場向生産はダース物を要求し、個人的、芸術的嗜好を——假令其があつても——少しも認めないであろう（中略）。而して技術と芸術とがいつかは、精神には幸福な清澄を、而して肉体には自然民族の間の最良のものを抽んでしめてゐる調和のとれた完全を取戻して、一段と高い律動的な統一を總括し得るであろうと云う希望を放棄してはならないのである。（K. Bücher: *Arbeit und Rhythmus*, 3. Aufl. S. 420-21.）斯くの如き観想の下、勢い消費生活の尊重、家政の重要性、家計簿の整備等の問題が擡頭し來るのであつて、氏は「国民経済進化論」第二集に於いて、「消費」（Die Konsumtion）「家政予算か経済計算か」（Haushaltsbudgets oder Wirtschaftsberechnungen）と題する論稿の下で、是等の

研究対象が展開されているのである。例えば其の家計簿の整備を強調する論旨の一端を示せば、下の如くである、「是等の労働者家計の窮迫に対処する有力な補助は、唯漸進的に生活水準を高めること及び一層よい家政教育を施すことによつてのみ、達せられるであろう。後者の点は他の階級にあつても亦、欠けている処であり、諸企業に於いて久しき以来普通視され、加之法律的であつたものは、家政に対しても亦、当然犯し難き命令たる可きであつた。即ち正確なる帳簿の作製、之れである。若し各人の家政が其の大小の収入を総て規則的に記帳したとすれば、其の意義は極めて大なるものがあり、このことによつてのみ、家政に対して一つの概観が得られる訳であり、仮令経済観念のない人でも、其の支出目録は当初は罪の帳簿であつても、後には其の罪を認む可き、改良への一步を踏み出すことが出来るのである。家計簿の出来るだけ簡単な勉強の過程を著作した人は、実に労働者階級の恩人とも云

う可く、況んや之を国民学校の教科目の中に入れた人は、尙お一層賞讃する可きであらう。」（K. Blicher: *der Volkswirt-* *schaft. II. S. 356.*）而して斯かる論旨が茲に強調されているのは、財貨の流通を前提とする国民経済下に於いても、尙お其の経済発展の初期段階たる家の経済、即ち自給自足経済の影響が現存していることを認め得るからであると説くのである。即ち次の如く述べられている、「此処に唯一つ改めて特に注意して置き度いことがある。其は家内経済——都市経済——国民経済なるものは、其の各々が相孤立して、全然他の入るを許さざる如き進化の段階を示すものではないと云うこと、之れである。各時代には必ず経済中の一つの方法が他に抽でて、其が其時代の人々の眼に常態として映じていたのに過ぎぬのである。故に尙お今日にあつても、多数の都市経済的要素の混入を見る可く、更らに彼の家内経済的要素さえ残存しているものが少くないのを知るのである。今日に於いても国民的財貨生産の

大部分は、国民経済的循環に加わらずして、其等の産出せられた特殊経済に於いて消費されているものが多い有様で、僅かに其の余の部分のみが、一つの経済から他の経済に移行し、其の経過を完結することとなっているのである。」（K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. I. S. 158.）

以上、氏の経済に対する考え方の特徴を叙述したのであるが、次に其の立定になる経済発展段階説が他のものに対して如何なる特異性があるかの点に就いて、考究して見よう。

先ず其の発展段階説の時代区劃の標準となつてゐるものは、財貨の流通と之に立脚している国民経済の成立とを、其の前提とするのである。其の所謂国民経済とは前にも引用した如く、「一国民の欲望充當を目的とする施設、設備、手続の相集まりて形成するものである。此の国民経済は更らに多数の個別経済に分たれるのであるが、斯く分たれた個別経済は、何れも交換流通によつて相互に結合せられ、極めて錯綜せる關係

に立ち、相互相寄り相扶けてゐるのである。」（K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. I. S. 85.） 續つて此の国民経済の性格を説いて、「斯くの如く各方面に対して相互關係に立ちつつあるものなるが故に、国民経済は吾人の後に横たわれる文化発展の結果なりと云い得るのである。（中略）又国民経済上の、一切の現象は、史的、文明的現象である。」（K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. I. S. 85.）と見るのである。斯く観來るに於いては、必ず経済発展段階を立定する要があり、国民経済の成立とは即ち経済発展段階を云うに外ならぬのである。而して可なるの種類を見る経済発展段階説の中で、氏の創案になるものの特徴とする處は、先づ財貨の流通と云う点から觀察したと、之れである。筆者は経済発展段階の諸説に二大分類を認めるのであつて、一は生産の面より区劃するものであり、他は流通の面より区劃するものである。前者の代表とも見る可きは、其の萌芽を既に遠く希臘時代に認められ、近世に至つてリスト（F. List）により

大成されたのである。即ちアリストテレス(Aristoteles)は其の著「政治学」に於いて、諸人民を牧羊者、農耕者、海賊、漁魚者、狩獵等に區別し、多くの人民は是等諸種の生産を兼ね行つたことを説いているのである。斯く經濟の発達を生産の形態から觀察すること、古くから行われた処であるが、此の思想は近世にまで及び、第一八世紀にはフアーガンン(Ferguson: the History of the Civil Society, 1767)ノンレンサー(Concorret: Prosp. historique des Progres de l'Esp. humain, Introduction, 1793)等、何れも此の方面から經濟の発達を説いたのであるが、其の最も著名なものはリスト(F. List)の説である。彼は其の主著である「政治經濟の国民的体系」(Das nationale System der Politischen Oekonomie, 1841)に於いて、「國民經濟は階段的に發展して行くものであつて、歐羅巴に於いて數世紀を通じて行われた過程は、野蠻の状態から牧畜の状態に進み、更らに農業の状態に入り、それより工、商業の状態に進むものである」と説き(Sammlung sozialwissenschaftl. v. Hcher Meister, III 1922. S.11.)

「國民經濟進化論」の根本思想(淡川)

又「國民經濟的発達に關しては、各國民の主要な發展的階段は、野蠻状態、遊牧状態、農業状態、農工状態、農工商状態と云うが如くに進むものである。」と述べているのである(a. a. O., S. 6)。是等の思想は最近の土俗学に深い影響を及ぼし、斯学に於いては、現在地表に棲息している諸民族に就いて、次の様な五つの經濟形態(Wirtschaftsformen)を區別しているのである。

即ち一・低度の狩獵民、二・高度の狩獵民、三・牧畜民、四・低度の農耕民、五・高度の農耕民、之れである(vgl. Grosse: Die Formen der Familie und die Formen der Wirtschaft; Koppers: Die ethnologische Wirtschaftsforschung [Anthropos], Bd. X, XI, 1915/16) 是等の論著の中でグロッセ(Grosse)の「家族の形態と經濟の形態」(Die Familien und die Formen)の論旨を反駁して、氏は次の如く述べている。「此の著書の中に、家族形式と經濟形式との關係を研究している。それにては狩獵民、牧畜民、農耕民などという、全く外面的範疇に囚われていて、經濟の内的生命、殊に家事には充分の注意を払つてい

ないのである。」(K. Bücher: Entstehung (der Volkswirtschaft. I. S. 45)。氏としては前にも屢次述べたるが如く、家の経済より漸次發展して国民経済が形成されたものと見るのであるから、生産と云う観点を棄てて、流通と云う観点に立脚して経済の本質を考察したのである。而して等しく流通と云う観点に立脚しても、シュモラー(G. Schmoller)は経済を営む人間の政治組織の変遷から著想し、マルクス(K. Marx)及びゾムバルト(W. Sombart)は「社会組織」(Vergesellschaftung)の観点から議論を立てたのである(C. J. Fuchs: Volkswirt. schaftstheorie. 5. Aufl. S. 30)。然るに氏は最初の生産者と消費者との間の関係の変遷、即ち財貨が一人の人から他の人の至る迄に經過せなければならぬ「道程の長さ」(Länge des Weges)、即ち流通の程度を標準にして、其説を立てたのである。而して其の論拠は凡そ経済は家の経済、即ち自給自足に初まり、終には自給自足とは正に表裏相反する流通経済に進化するものであると云う、其の根本思想に由来するのであ

る。而して其の所謂流通経済の終極の段階を国民経に求めていふことも亦、氏の段階説の、一つの特徴と見なければならぬ。此の点に就いては、シュモラー(G. Schmoller)の其と比較考察すれば、最も明白となるであらう。シュモラー(G. Schmoller)は夙に経済生活と政治社会組織との関係の重大なることを認め、此の方面の発達を説いている。即ち其の論文「其の歴史的意義に於ける重商主義組織、即ち都市的領域的経済政策」(Das Merkantilssystem in seiner historischen Bedeutung: städtische, territoriale Wirtschaftspolitik.)に於いて、次の如く論じている、「経済発達、総ての段階に於いて、其の発達を左右す可き関係は、当該民族の政治組織に帰せざるを得ない。此の政治組織は或いは血族団体及び種族たることあり、或いは村落及び村落共有地たることあり、或いは領地なることあり、或いは国家なることあり、若しくは聯邦たることもあるが、其は常に経済生活を支配し、其の組織制度を定め、全社会的経済組織の重心点をなすものである。勿

論此の政治組織は經濟の發達を説明す可き、唯一つの要素でないことは明かであるが、而かも現時に至るまで、歴史上に起り來つた処の、種々なる經濟組織の形式に対し、最も深刻な影響を与えた、重大な意義を有するものと云わなければならぬ。而して政治組織が種族から疆域団体、村落、都市、領地、国家、聯邦等に發達するに伴うて、社会經濟団体も亦時代を追うて、其の範圍を大にし、次第に經濟の發達を見るに至るものである。」と説き、以つて村落經濟 (Dorfwirtschaft)、都市經濟 (Stadtwirtschaft)、領地經濟 (Territorialwirtschaft) 及び國民經濟 (Volkswirtschaft) の、四つの段階を認め、更らに其大著「國民經濟原論」に於いては、經濟は家族經濟、種族經濟、村落經濟等の階段から都市經濟に進み、國民經濟に至り、最後に世界經濟に發展するものなることを述べ、國民經濟の次に世界經濟を加えて、其の前説を補充しているのである。故に氏の説は村落經濟、都市經濟、領域經濟、國民經濟、世

界經濟の五つの段階を区劃したことになるのである。

(G. Schmoller: Grundriss der Allgemeinen Volkswirtschaftslehre, Tl. I, 1920, S. 4, 315ff.) 而

して其の所謂世界經濟に就いては、次の如く述べている。「國民經濟は一国土、一國民、一国家内に存する同等關係及び支配從屬關係をなせる經濟の全体を包括せんとするものである。然し吾人は更らに進んで、地球上に於ける、総ての經濟生活を考へなければならぬ。現今の經濟は相互に交渉し、相侍り相扶ける關係を有するものであるが、是等國民經濟の全体を稱して世界經濟とは稱するのである。」氏の如く政治組織を以つて經濟發展の段階を區別する標準となす者に取つては、国家間に於ける諸關係の頗る重要な現時をもつて世界經濟となし、之れを國民經濟から分つことは、元より当然であらうが、イリー (Ely) が、ビヒアー (Bücher) の三段階に就いて、「世界經濟」(world economy) なる一時期を國民經濟の次に附加したのは、當を得ていないであらう (Ely: Evolution of Industrial Society, 1903, p. 71.)

蓋しビュヒアー (Bücher) の採った様な、流通を標準にする見方よりすれば、世界経済は国民経済の発達の中の一時期として考う可きであつて、氏の所謂都市経済から国民経済に進むと同一觀念の下に、国民経済から国民経済に進むと見るのは、氏の真意を了解せざるものを云わなければならぬであらう。而して此の点に関する氏の見解の、最も明白に吐露されている個処は、其の「国民経済進化論」第一集の第三講として収められている論稿の、「国民経済」の特徴を説き終つた、次の一節である、「自由主義時代に入つてより、國際交通が愈々盛行することよりして、国民経済の時代が後退して、其の代りに世界経済の時代が生れるであらうと結論するならば、其は大なる誤見である。欧羅巴諸国に於ける、最近の政治的進化は、重商主義の復活と又一部分は古い都市経済思想の再燃とも見る可きではないか。而して彼の保護関税を復活せんとし、國民的貨幣本位と國民的労働三法とを固執し、既に完成し

若しくは完成を目指している交通横関、労働保険、銀行事業を国有となし、進んで一切の國家活動が愈々經濟範圍に侵入し來れるの現状は、時代が専制主義時代の自由主義時代を経て、國民經濟の三期に足を踏み入れたことを示すものではないか。此の國民經濟の第三期は、一種獨特の社会的実相を呈しているのである。其は單に國民的生産によつて國民的欲望を出来るだけ独立的に、又出来るだけ豊富に充當せしめることを以つて足れりとするものではなくして、更らに進んで其の國民全体をして各自特有の經濟的給付に應じて、文明の福祉に關与せしめんとする目的を以つて、公平なる財貨分配を期し、獨特の共同經濟的國家活動を行わんとするものである。而して此の爲めに必要な手段方法は、唯大規模なる段階に於いてのみ、其の実行を期待し得るのであつて、大なる國民的國家を築つて始めて望むことが出来、之は總ての個人能力の完全なる結合を必要とするのである。

今日歐羅巴に於いては、国家が一方では其の食料品及び享樂資料の大部分を他國に仰いでいるが、又他方では其の工業生産能力は遙かに其の自國民の欲望を超過して常に余剰を生産し、之を他國の消費範圍に供給せざるを得ない様になっているのも事實である。然し斯くの如く相互に相倚り相扶けつつある工業國と原料生産國との対立、即ち「國際的分業」を以つて、人類が世界經濟と云う名称の下で、家内經濟、都市經濟及び國民經濟なる三階段に対立せしめねばならぬ様な、進化の、新しい時代に到達しつつあるものなりと思ふならば、其は明かに誤れる見解である。蓋し一方より考へるならば、從來如何なる經濟發達段階に於いても、未だ曾て欲望充當の、完全なる自主性を保証し得るものは一つもなく、何れの時代にあつても、必ず或る程度の間隙を生じ、種々なる手段を講じて此の間隙を補充するものなることは、吾人が既に屢々見て來た事實であるが、又他方から考へるならば、彼の所謂世

界經濟と稱せられるものにも、今日迄は少くとも國民經濟の現象と其の根本的特質を異にする様な現象は、一つも之を認め得ないのであつて、將來に於いても斯くの如きものが發生し得るには、考へ得ないであらう。」(K. Bücher : Entstehung der Volkswirtschaft. I. S. 148-49.)

尙おシュモラー (G. Schmoller) の發展段階説とビュヒアー (K. Bücher) の其とを比較して考察す可き、他の、一つの点は、前者が「中世封建制度の世にあつては、諸侯は各其の領地に割拠し、都市の中で其の勢力を失つたものは、多くは諸侯によつて併合されたが、其の富力と勢力とを充實したものは、隠然諸侯に対する一勢力となり、或いは周囲の土地を攻略して大なる領土を獲得するに至り、是等諸侯と都市との外に、尙お有力な僧團が其の領地を占有せる結果、各國は四分五裂の状態を呈し、何れも其の、廣大なる領地を基礎として、新なる經濟組織を構成し、爰に所謂領地經濟

(Territorialwirtschaft) なるものの発生を見るに至った G. Schmöller 氏 (G. Schmöller: Grundriss der Allgemeinen Volkswirtschaftslehre. Tl. I. S. 315 ff.) との主張の下に、都市経済と国民経済との間に、別に領地経済を挿入しているのである。然しビュヒアー (K. Bücher) の採っている標準である財貨流通と云う点より見れば、其の所謂領地経済は原則的には都市経済又は国民経済と何等異なる処なきものであり、領地は此の場合には都市或いは国に相応するものである (C. J. Fuchs: Volkswirtschaftslehre. 5. Aufl. S. 31)。又領地経済の如きは、独逸に於ける経済発達の実事より見れば、一時代を劃するであらうが、西歐羅巴の諸国にあつては、領土の擴張が行われない裡に民族の統一が行われ、既に早く国民経済の段階に進んだのであるから、経済進化と云うが如き、其の学説が特に一般性、普及性を強調す可き立場にあるものとしては、単に独逸の事実のみに基づく一時期を一般経済の発達を論ずる段階説に採用せなかつたことは、尤より当然であらう。

尙お進化と云う観点よりすれば、其の重要なことは、必ず一時代には其の前時代の影響が存在していると云うこと、之れである。此の点に關しては、氏は其の、多くの論稿の随処に述べているのであるが、次に最も明白な一節を引用して見よう、「爰に唯一つ改めて特に注意して置き度いことがある。其は家内経済、都市経済、国民経済なるものは、夫々が各孤立して存在し、全く他のものが入つて来るのを許さない様な、進化の段階を示すものではないと云うこと、之れである。各時代には必ず経済中の、一つの方法が他の方法よりも卓越し、其が其の時代の人々の眼に常態として映じていたのに過ぎないのである。故に尙お今日にあつても、多数の都市経済的要素の混入を見、更らに又彼の家内経済的要素さえ残留しているものが、少くないのである。今日に於いても、国民的財貨生産の大部分は国民経済的流通に参加せずして、其の産出された経済単位内に於いて、消費されているものが極めて多いの

であつて、僅かに其の、爾余のものが一の經濟單位から他の經濟單位へ流通し、以つて其の過程を完結してゐるのである。(K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. I. S. 158.) 即ち其の特に強調していることは、發展段階の各々につき、其の常態の特徴を抽出して説明する一面に於いて、他の段階の影響を認めることの重要性である。而して此の影響は、夫々其の残留している時代の常態の下に於いて、其の特質を把握す可きであると説くのである。此の点に關して、氏は更らに次の如く続けている、

の現況を全然誤解しているのと何等異なる処がないのである。今日に於いては如何に遠隔の地にある農家と雖も、國民經濟的流通の全体と関聯無くしては、僅か一俵の小麦をすら尙お生産し得ないであらう。假令其が生産者の家の内に於いて消費し尽されるものでも、犁、大鎌、打禾機、人造肥料、輓獸等の生産手段は、交易流通の過程を経て得たものである。而して斯かる自家消費が行われるのも、必ず其が市場關係から見て經濟的であると思惟されるに由るのである。斯く觀來れば、僅か一俵の小麦と雖も、尙お國民經濟的流通の大規模にして且つ精巧なる綱に、強固なる綱を以つて結合されているのである。吾人の經濟的行為及び經濟的思考は、何れも斯くの如き範圍を出でないのである。(K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. I. S. 158-59.)

然し斯る見解は正当とは云い得ないのである。若し此の見解の如くであるならば、百年以上に亘る科學的研究の結果を空しく放棄するのと同様であつて、經濟

以上要するに、氏の學風の根本を為すものは、經濟的進化の思想であつて、經濟に屬する、一部の事項、例えば商業、農業、交通、林業、廣告等に就いても、

何れも此の発達史的考察が施されて居り、而して其の、
総ての場合に、国民経済を以って終極の到達段階と為
し（vgl. K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. II. S. 387.）絶えず個々の経
済現象を此の見地から観察していることに、其の特徴
を認めなければならぬ。

本稿を起すに当つても、権田氏の訳著を参照すること少
からず、附記して謝意を表す。